出來つるなり、一代女草子、三金紙のはね元結といふ條あり、反せんが爲に、はりがねを入たるなり、世の人心、一針がね入のはね元結と見えたり、みな若ざかりの婦女が用ひしなり、今のごとく女の童のみの物にあらず、色芝居草子、やつはり髪は、大ていにはね元結も目にたゝず出し、髪も少しつと有て、おくれの出たはうるさいもの云々、略○下

〔西鶴織留一〕古帳よりは十八人口

銀の笄に金紋を居させ、さんごじゆの前髪押へ、針がね入の刎髻（はねもつとひ）を掛て、略○下

〔倭訓栞前編三十三毛〕もとゆひ　繪本結といふ物あり、鶴龜松竹などの綵色、あや杉紅なるをつま紅といふ、こは宮方よりすけまで也、内侍より以下は、つま紅はならず、一方をすこし紅にして、摸樣は同じと、内々行事に見ゆ、是をだうどもとゆひといふは、堂童子本結の義也といへり、堂童子は花筥賦（クバリ）など役する人をいへり、

〔貞丈雜記八調度〕一いれもとゆひ、又大もとゆひとも云、今は繪もとゆひと云、ふとくたゝみ、兩端に玄んを入れて、金箔にてだみて、色々の色にて松竹鶴龜などを繪く也、

入もとゆひの圖

大サ是ほどなり
寸法定なし

兩はしは紙を卷きて玄んを入る、此卷目にも金箔ををくなり、中程むすぶ所の分はひろくするなり、

〔宣胤卿記〕永正八年二月廿七日戊申、今日春日祭也、略○中參若宮社、同兩段再拜、仰巫女奉神樂、付一ケ文

〔寛天見聞記〕其頃享和○縮緬紙とて、ちゞまりたる紙に、彩色の摸樣したるうつくしき紙を、髻ゆひにす、田舍にては、雛の幕に用ゐける、今は縮緬の鬼絞りなどとて、價百疋の餘もすべし、

〔近世事物考〕きんか元結。